



恋は罪、それでも美しく

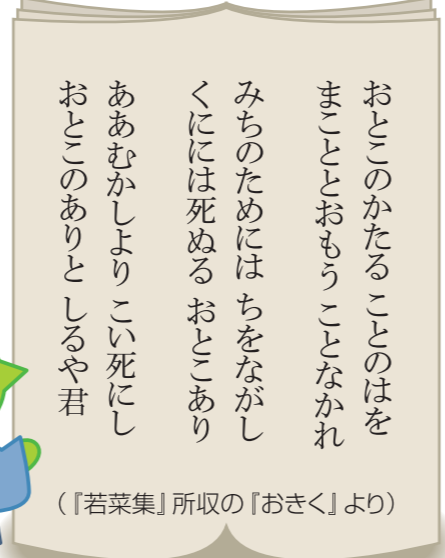
島崎藤村文学に思いを馳せる



三重大学教育学部・教授
高橋 昌子 Takahashi, Masako



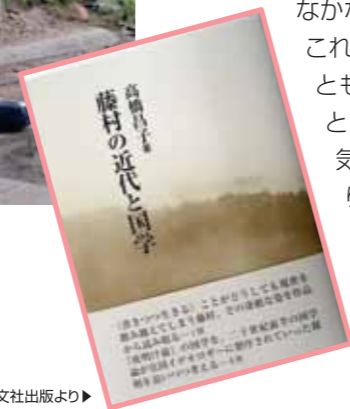
◎今に通じる明治青年の心



(『若菜集』所収の『おきく』より)

藤村というと『初恋』や『椰子の美』などの詩が思い浮かびますね。それ以外のことは今知らない人も多いと思いますが、彼の処女詩集『若菜集』を改めて読むと、その冒頭、詩人は女性に仮装して女の恋心を六篇にわたって詠い続けています。

富国強兵の明治時代、男は「みち」や「くに」のために戦えという時に、こんなふうに、女の声で25歳の青年が言葉を発したのは、なかなか興味深いことです。これは一種のマイナー指向ともいえ、オタクやニートといわれる現代の若者の気分と通ずるところもあります。今の若い人たちも、心が閉じふさがった時、とにかくその心を言葉で表現してみるといいのではないのでしょうか？



双文社出版より▶

藤村文学入門

- 👤 作品に登場する女性像を読む
- 🖼️ 作品を絵画と一緒に感じる
- 📖 作品の風景を歩く

【島崎藤村年表】

- 明治5年(1872年) 筑摩県馬籠村に生誕する。
- 明治14年(1881年) 上京。泰明小学校に転入する。
- 明治25年(1892年) 明治女学校の教師になる。
- 明治29年(1896年) 東北学院の教師になる。
- 明治30年(1897年) 『若菜集』を春陽堂から出版する。 ← 恋する女性たち
- 明治32年(1899年) 秦冬子と結婚し、長野県小諸義塾に赴任する。
- 明治34年(1901年) 『落梅集』を出版する。 ← 差別や貧しさに向き合う女性たち
- 明治39年(1906年) 『破戒』を出版する。 ← ターナーや印象派の風景画
- 明治41年(1908年) 『春』を出版する。 ← ポッティチェリの『春』やD・G・ロッセッティの女性像
- 明治43~44年(1910~1911年) 『家』を出版する。 ← 親族のしがらみや放縱な夫に苦しめられる女性たち
- 昭和2年(1927年) 『山陰土産』を出版する。 ← 円山応挙や雪舟の絵画・作庭
- 昭和4年(1929年) 昭和10年まで中央公論に『夜明け前』を連載する。
- 昭和18年(1943年) 大磯の自宅で逝去する。71歳

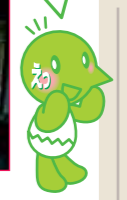


● **藤村記念館**
藤村の小諸時代を中心とした作品・資料・遺品が多数展示されています。藤村は小諸義塾に教師として赴任し、約6年間この地で過ごしました。

● **懐古園**
懐古園は小諸城跡で三の門には徳川家達公筆の「懐古園」の額があります。『落梅集』所収の『小諸なる古城のほとり』でも知られています。

藤村処女詩集『若菜集』所収の『初恋』より

ちなみに10月30日は『初恋の日』なんだった！



まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君とおもひけり…



● **千曲川**
『落梅集』所収の『千曲川旅情の歌』や『千曲川のスケッチ』の舞台となりました。千曲川は藤村が愛した川で清らかな流れで信州を潤しています。ちなみに千曲川は長野県を流れる信濃川の名称で、新潟県に入ると信濃川となります。



● **中棚温泉、中棚荘**
『千曲川旅情の歌』の中に出てくる“岸近き宿”は現在の中棚荘のことです。藤村文学を好む人にはなくてはならない宿です。初恋の日(明治29年10月30日)島崎藤村が初恋の詩を発表したことを記念する日、制定したのはこの中棚荘です。

『思えば、言うぞよき。ためらわずして言うぞよき。いささかなる活動に励まされてわれも身と心とを救いしなり。』と、藤村は言っています。(『藤村詩集』序)

ちなみに刊行当時、『若菜集』は〈軟派〉の若者が隠れて読み、デートの時に女の子を口説く小道具にされたりしました。今でいうと、女の子をドライブに誘って車中で聞かせるラブソングみたいなものですね。

◎ **恋の詩に藤村が秘めたものは**
藤村詩の恋は現世の規範を踏み越えて、罪へ、狂へ、死へと突き進んでしまいます。しかし、『若菜集』はそんな逸脱をドロドロトではなく、やわらかな言葉で芸術化しました。その格調は日本的な優しい韻律から来ていますし、また、高遠なものに憧れたイギリスロマン派の詩人や画家から学んだためだとも思えます。藤村詩の女性は、D・G・ロッセッティの描いたような女性像に重ねて読めます。絵画と文学を併せて考えるのも文学研究の楽しさです。

◎ **文学は常識を破りたい**
文学は学問の対象といえるのでしょうか？ 目に見える成果や効率が求められる昨今、芸術や文学研究は不必要な分野にされかかっています。けれど、科学や工学の発見や発明を産み出す創造的な精神は、文学や芸術に見られる「逸脱」と似ているところもあります。目先や常識に縛られず、遠い時空に思いを馳せる心が弱まったら、科学もやせ細ってゆくのではないかと思う日々です。